

デビッド・ヒュームの経済論

正井敬次

一 ヒュームと経済学

ヒュームの経済に関する著述は一七五二年の「政治論」(Political Discourses)のうちの諸論文から成っている。それらの経済論によつてヒュームは自由主義と反重商主義の思想と政策とを指導したと言ひ得るのであるが、しかしその際ヒュームには未だ経済学としての特殊の理論体系が構成されていなかった。ヒュームの後にケネーの「経済表」と次いでアダム・スミスの「国富論」とが現われ、茲に経済学が成立したと言われるが、それらは今日の用語での巨視的の理論であり価値論の上では客観主義的の理論であつた。では若しヒュームによつて特殊の理論体系が建設されていたとすれば、それはいかなる経済学になつていたであらうかと云うに、恐くばそれは百年後の限界效用学派に指導原理を供与する微視的・主観価値的の経済学ではなかつたかと思われる。人間性の研究について経験的分析の方法を用いるというヒュームの根本思想から推して、経済学において予想されるヒュームの立場が右の如くに推測せられる。

ヒュームの哲学上の主著「人性論」(A Treatise of Human Nature, 1739)の表題には、「精神上の問題に経験的

の推理方法を適用せんとする一の試み」という文言が附け加えられている。そのようにこの「人性論」は、人間の悟性・感情・道徳などについて、自然科学と同様な帰納的・経験的方法での研究を行うことを目的とするものであり、従つてこの書はヒュームの用語での「人間学」(Science of Man)の理論を説こうとするものであつた。経験主義の立場が先ず「人性論」の序文で表明されているのであるが、例えばそのうちに次のような言葉がある。

「哲学者が研究する学問であつても小工場で行われる技術にしても、経験を基礎とすることなしにそれらの原理を設定することはできない。窮局の原理は経験を越えたものであるかも知れない、とすれば経験による人間学では窮局の原理を説明することが不可能であり、従つてそれがこの学問の欠点であると言われるかも知れない。しかしそれは人間学が他の科学と共にもつところの欠点である。」またヒュームは「人性論」を出版した後、一七三九年九月にハチスン教授に送つた書面で次のようにも述べている。「心身の微妙な原理と動機を発見するにしても、またはその作用の高雅と莊美を説明する場合にも、人はそれらを一の解剖学者としてまたは一の画家としてこれを行うことができる。」即ちヒュームは人間性の研究を経験を基礎として而して解剖学者の立場でこれを行わんとするものであつた。

経験主義の哲学では物の実体(Substance)に関する究明を問題にせない。そこでヒュームが悟性の対象とするものは彼の用語で哲学的「関係」と称する事物の関係であり、その最も重要なものは因果関係であつた。因果関係または必然的關係の哲学的説明が「人性論」第一卷「悟性論」のうちで行われているが、その常識化された説明が一七四八年の「人間悟性の研究」(An Enquiry Concerning Human Understanding)によつてなされている。それによると、人間社会における因果の必然性には自然現象でのそれに類するものがあると云うのであるが、ヒュームの

この因果法則は経済学での動態理論に一の原理を供するものであつた。

しかしヒュームが残した更に重要な遺産は *utility* の思想であつた。即ちそれが直接にはベンサムとミルの功利主義理論に根拠を与え、間接には後の效用経済学を指導するところがあつたと云い得るからである。ヒュームは *utility* の原則を、社会的秩序のための「公正」(Justice)の要因として、而して主権と服従との関係である政府の存立を説明する方便としてこれを説いたのであつて、後の效用経済学がこれを用いたのと同一の方向にそれを説いたのではなかつた。しかし何れにしても *utility* を一の社会的要因として認めた最初の学者はヒュームであつた。ではヒュームと效用経済学との関係はどうかと云うに、英国での限界效用理論はゼボンスによつて創められたが、ゼボンスは *utility* の原則をベンサムの著述からこれを得たと云つてゐるのであり、ベンサムはまたそれをヒュームによつて教えられたと述べてゐる、という関係が存在するのである。

ベンサム最初の著述『A Fragment on Government』は一七七六年(ヒューム死去の年)に出版せられたが、この書でベンサムは政治の問題に *utility* の原理を用いたが、それがヒュームの「人性論」の第三卷「道德論」を読んだ結果であることを、彼はこの書の脚註で詳しく述べてゐる。即ち、政治論で当時の通説であつた「契約説」に不満であつたベンサムは、何か他に合理的な指導原理をつかむことに苦心してゐたが、それがヒュームの著述を読むことによつて解決せられた、と云うのである。而してベンサムは、「私は記憶してゐる、この書物のその部分を読んだとき全く目がさめたような気がしたことを、即ち私はすべての徳の根拠が *utility* に存することを知つたのである」、と述べてゐる。右のようにしてヒュームの原理がベンサムに影響してそれが功利主義理論を生み、次にベンサムを通してそれが效用経済学を指導したのである。

右に述べるようなヒュームの学問上の思想と方法とをもつてして、若しヒュームが経済学の一の特殊の理論体系の建設に當つていたとするならば、その経済学は後の效用経済学に向つて端緒を聞く性質のものでなかつたかと思われる。しかし初めに述べたようにヒュームには未だこの意味での経済学はなかつた、而してまた彼の時代には他の学者によつてもヒュームの方法による経済学は建設せられなかつた。

経済学の理論体系の問題を離れて、経済の思想と政策に関するヒュームの地位を問題にするならば、ヒュームは明かに自由主義と反重商主義の指導者であつたと云い得る。

ヒュームはその経済論のうちの「商業論」において、「世界のあらゆるものは勞働によつて購買せられる而して勞働の動因は人の感情である」、と云う重要な命題を掲げている。アダム・スミスも「国富論」の冒頭で勞働について同様のことを述べたように、この言葉が自由主義の根本思想の表徴である。なおヒュームの右の命題の後段「勞働の動因は感情である」という点は、後の限界效用理論に重要な原理を供するものであるが、之れについては茲に多くを説かない。次に自由主義における国家または政府の機能の消極性がアダム・スミスによつて強調せられたが、それは元々ヒュームの道德論と政治論での思想であつたのである。次には國際商業における自由貿易の理論、それにはヒュームの多くの論文がその主張に向つてささげられているのであるが、ヒュームの論文が特にフランスにおいて歓迎せられたと云うのは、寛容と自由の精神に基づく自由通商の主張によつて、ヒュームが、隣国を敵視する偏狭なる英国の重商主義貿易政策を手ひどく攻撃したからである。その他多くの点でヒュームは自由主義経済に指導的思想と原理とを供給しているが、その根本精神とは云えば、それはヒュームの著述のすべてに溢れている「公正」の徳の尊重と「人間愛」の感情とである。

二 ヒューム経済論への諸學者の批判

経済学におけるヒュームの地位を示すための簡單なる叙述を右のように行つたのであるが、更にヒュームの置かれた立場を具体的を知るためには、ヒューム以後の學者がヒュームの経済論に対して行つた批判について検討を試みることに有意義かと考へる。批判する學者としてはアダム・スミス、マルサス、ゼ・エス・ミル、マルクスを而して近時の學者としてはケインズを選ぶことにする。

アダム・スミスは「国富論」第三卷第四章で都市の商業が国の進歩に貢献する点について、「戦争とか圧制に苦しんでいた国であつても、商工業が発達すると社会の秩序と良き政治がその国に生れ個人の自由と安全が確保せられることになる」、と述べている。而して、これは平凡なことのようにであるが重要なことで、従来この点を問題にした唯一の學者はヒュームであつた、と言つてゐる。即ちヒュームは「商業論」その他の論文で、商工業と文化及び政治との關係を右にアダム・スミスの述べた方向に強調していたのである。次にアダム・スミスは「国富論」第二卷第二章で紙幣と物価との關係について、「紙幣の増加は通貨全体の數量を増加せしめ、諸價格を騰貴せしめると往々に説かれるが、通貨のうちから除去される金銀貨幣の量が通貨に加えられる紙幣の量と同一であるとすれば、紙幣が必ずしも通貨量の増加と物価騰貴を招くものでない」、と述べ、而して次に、「ただ一七五一年とヒューム氏が政治論を公にした一七五二年と、……には食料品價格の大なる騰貴があつたが、これは恐くば天候不良のためであつて紙幣増発に原因するものでなかつた」、と説いた。

右についてアダム・スミス研究の多くの學者は次のように解している。即ち、右にアダム・スミスが特にヒュー

ムの名を出したのは、ヒュームが「政治論」のうちの「貨幣論」と「貿易收支論」で物価騰貴原因としての紙幣の弊害を説いた点を問題にして、このヒューム説を批判する意味においてであつたのである、と。右について筆者は次のように考える。ヒュームは「貿易收支論」で、特に紙幣についてその流通が金銀貨幣を減少せしめること而してそれが一国の国際的地位の上で好ましくならぬことを説いたのであるが、物価騰貴については紙幣と金銀とに拘らず貨幣量の増加そのことが原因であつて、金銀に換わる紙幣であるが故に特に物価騰貴が起るとは説いていない。また他の論文で銀行信用が産業活動を増進すること、しかし一面には物価騰貴を招く点について述べたことがあるが、その場合の銀行通貨をヒュームは金銀に代位するものとしては説かなかつたのである。しかし「政治論」以外の論文なり書簡なりでアダム・スミスがヒュームの意見を右に推測されたように受け取つたのであるかも知れない、とすれば別であるが、「政治論」での経済論文ではアダム・スミスからの批判が想像されるような点は存在せなかつたのである。

次にはゼ・エス・ミルがその経済原論でヒュームの所説に関して述べたところについて一言する。

ミルは原論第三卷第十三章に不換紙幣のことを説いているが、その第四節で、紙幣の膨脹が産業を促進するといふ誤つた説によつて不換紙幣論者が支持されている点を指摘して、次の言葉を述べている。「不換紙幣論者が根拠とするいま一つの謬説は、通貨の増加が産業を促進するという考え方である。この説がヒュームによつて彼れの貨幣論において高唱せられた(This idea was set afloat by Hume in his Essay on Money)。而してそれ以来この説に多くの追従者が生ずることになつた。」これによるとミルはヒュームを不換紙幣論者とは言わないが、少くとも通貨膨脹論者と見たことになるのであるが、ミルのこの言葉は甚だ無責任な言いかたであつたと思われる。ヒューム

の「貨幣論」にはミルの言葉に当る点は少しもないのである。「貨幣論」の要旨は、貨幣量の大小は一国の経済の本質にとつて良くも悪くもないことである、アメリカ大陸からの大量の金輸入でヨーロッパの経済が繁栄したと云われるが、貨幣量の増大そのことが良いことではないので、一国の経済に好ましいことは、貨幣量が増加し物価が騰貴するまでの過程での国民の生産活動が活潑になる状態そのことである、というにある。右要旨の最後の部分について、ミルがヒュームを通貨膨脹論者と見るのは「貨幣論」の主旨を見誤つたものと云わねばならぬ。「貿易收支論」でヒュームは銀行信用制度の商業上の便益を説いているが、これとてもミルの言葉に該当するものでない。ヒュームは貿易政策上の重金主義を排撃した、しかしそれが決して通貨膨脹論に関係するものではない。ヒュームは、貨幣・貿易・公債などのすべての論文で極端に信用膨脹の害悪を説いたのである。

次にはマルクスのヒューム批判について述べる。マルクスは「経済学批判」第二章「流通手段及び貨幣に関する学説」で先ず次のように述べてヒュームの批判を行つた。「諸商品の価格は流通貨幣の数量に依存し、逆に流通貨幣の分量が諸商品の価格に依存するのではないという命題」、この理論の十八世紀における最も重要な代表者はヒュームであるから、先ずヒュームを手はじめに批判を始める、と。即ちマルクスはヒュームを貨幣数量説の代表者と見たのである。次に「資本論」においても第一編の第三章で「貨幣の流通」を説くに当つて、ヒュームの理論（諸商品価格は貨幣数量の変動に比例して変動するとの理論）がアーサー・ヤングによつて説かれていたこと、而して更にバアボンとかそれよりも遙かに古い著作家にもその説が見出されると説いた。またその際、ヤコブ・ウアンダーリント^{*}の著述「貨幣はすべてのものに応ずる」（ロンドン、一七三四年）にも貨幣数量説の思想が示されていること、而して右の著述とヒュームの論文とを比較してみると、ヒュームがその著述を利用したことを疑い得ない、と

述べている。

* ヴァンダーリントの右の著述については次の書物がある。Jacob Vanderlint, *Money answers all things*, 1734. edited by Jacob H. Hollander, Professor of Political Economy, Johns Hopkins University, 1914. ヴァンダーリントの生活も、この論文が公にされた事情も明かでない。一八一〇年、Dingald Stewart が云つたところによると、「国富論」が出たよほど後までヴァンダーリントは学界の注意をひかなかつた。と。マカロックによると、自由通商の主張者としてのヴァンダーリントの思想はヒュームと相い通ずるところがある。と。また Mrs. Rhys Davids によるとヴァンダーリントは英国における科学的社會主義の創始者である。と。以上のことは筆者が上記のホランダー教授出版書の解説によつて知つたことである。なおヴァンダーリントの身分については、この書の献本の辭が "To the Merchants of Great Britain" としてあるので彼もまた商業に従事する人であつたか、と云われている。

さてマルクスのヒューム批判についてであるが、それは次のような点から見て的外れの批判でなかつたかと思われる。「経済学批判」でマルクスは貨幣数量説（勿論マルクスはこの名称を用いながつたが）の命題を示して十八世紀でのこの説の代表者はヒュームであるから、と述べているが、実はヒュームの論文では右の命題が十分に説明されていないのであり、従つてヒュームはマルクスが思つたほどに貨幣数量説の代表者ではなかつた。次にマルクスはヒューム自身が貨幣数量説の創設者であるかのように自負しているものと考へて、この説が古くから説かれていたことを述べ、それがヒュームに独得の説でないことを言おうとしたのであるが、これも見当ちがいでなかつたかと思われる。ヒュームは「貨幣論」と「貿易收支論」で、貨幣量と物価とは比例的のものであるから貨幣量の増大は一国の経済にとつて重要なことでない、という意味のことを屢々述べている。しかし貨幣量と物価との関係を正面から取り上げてこれを問題にしたことはなかつた。ヒュームは主として金銀の獲得を一国の利益とする重商主義政策の誤りを正すための方便として、貨幣と物価との関係について右のような数量説的の説明を行つたのである。

そこで筆者の見る所では、ヒューム自らにおいて、貨幣數量説が彼れ独自のものであるとも、その説の主張が「貨幣論」の目的であるとも考えていかなかった。と云うのはヒューム「貨幣論」の特色は他の点にあつたからである。

アダム・スミス、ミル、マルクスのヒューム批判はすべて貨幣と物価とに関係するものであつたが、次には人口問題についてマルサスがヒュームの論文に加えた批判について述べることにする。

ヒュームの人口に関する論文は「政治論」のうちの「古代諸国の人口繁栄について」(Of the Populousness of Ancient Nations)の一篇であるが、マルサスはその「人口論」第一版でこの論文を批判している。ヒュームは、古代諸都市の人口が想像以上に稠密であつたという説が一部の学者によつて称えられていたのに対し歴史的研究によつてこの説に反対の論証を行うために右の論文を書いたのである。ヒューム論証の一端を示すと、例えば奴隷は古代には存在し現時には存在せないが、奴隷は主に独身であつたから奴隷制度は人口増加に寄与せなかつたのであり、この点で人口増加の条件は古代の方が悪かつたのである、と。

右の推論に対してマルサスは次の如くに批判する。例えば古代史上のある時代に、早婚が流行し独身者が多くなかつたとすれば、これによつて人口が既に稠密であつたとは考えられない、否むしる人口は稀薄であつて場所と食料とに十分の余裕があつたに違ひないと考える。また若しある時代に、家庭をもつことが困難で男女ともに独身者が多いという事実があつたとすれば、人口は既に停頓しており、場所と食物に余裕がないのでその状態が出現したものと判断する。ヒュームは独身者の多いことを人口増加のない証拠であるとするが、私(マルサス)はそれは人口が十分である証拠だと考える(初版人口の原理、高野・大内氏訳五八頁)。

マルサスはヒューム死去の年には十歳であり、父は古典と哲学の研究を通してヒュームと交際があつた、それで

マルサスはヒュームを尊敬していたと思われる。そこでヒュームの説を批判するに当つて、信頼すべきヒュームの説に異論をさしはさむのであるから大いに躊躇した上のことである、と述べている。マルサスはヒューム説について「原因の研究と事実の研究とを混同している」と言っているが、いかにもその点はある。しかし筆者は茲では人口論に関するマルサスのヒューム批判について検討することを省略する。

終りに近時の學者としてのケインズがヒュームについて述べたことに関して一言する。それは「一般理論」第二十三章、重商主義その他に関する覚書（塩谷氏訳書四一三頁以下）でジョン・ロックについて述べたことに関連してヒュームに言及せる点についてである。ケインズはジョン・ロックについて、一方の足を重商主義者の世界におき他方の足を古典派の世界において、云々と言つて次にヒュームについては、ヒュームは古典派の世界へ一方の足と他の足の半分とを入れていた、と言ひ、その理由として、何故なればヒュームは、現実の世界を均衡に向つて絶えず移動する過渡的狀態において見る程度において、十分に重商主義者であつたが、しかし彼はこの過渡的狀態に対比される均衡狀態の重要性に力点をおくという経済學者達の慣行をはじめていたからである、と述べる。而してケインズは右の点に関してヒュームの「貨幣論」のうちから数行の言葉を引いている。その引用が右にケインズが言つたようなヒュームの立場の説明に適當するものであるかどうかは別として、ヒュームによつて均衡狀態または正常的狀態を基本とする説明方法が重要とせられたことは事実である。

三 貨幣論 (Of Money) についで

「政治論」におけるヒュームの経済論文は、商業論・奢侈論（後に「工芸の精練」と改題）・貨幣論・利子論・貿易

收支論・貿易上の偏見・租税論・国家信用論・古代人口論などであるが、後人によつて最も多く問題にせられた論文は幣貨論と貿易論とである。そこで本稿では貨幣論と貿易論とについてのみその内容を紹介することにする。

貨幣論の内容は前にも一言したように、貨幣數量説の命題を説明することを目的とせるものでなく、貨幣の豊富そのことがまた貨幣の稀少そのことが一國の繁栄に関係するものでないことを説くことが、ヒュームの主眼とするところであり、而してまたこの貨幣論でヒュームは銀行信用（紙幣）の弊害を説くのもあつた。（この点で、ミルはヒュームの貨幣論を通説するだけの親切に欠けていたように思われる）。

貨幣論の冒頭の言葉は、「貨幣は商業上主要のものでなく、それはただ人々に承認せられた、商品交換を便ならしめるための道具に過ぎない、それは商業の車輪と云わるべきものではなく、車輪の運転を円滑・容易ならしめるための油である」というのである。それはヒュームでなくとも更に古い学者によつて言われてきた言葉であるが、ジョン・ロックが貨幣を商業の車輪と言つたに對し、ヒュームは一層貨幣の手段性を誇張して車輪の油であると言つたまでのことである。しかしヒュームは続けて、「いま一國内部の関係からすれば、貨幣がより多く豊富であるかより少くそうであるかは何等重要なことがらではない、何となれば商品の価格は常に貨幣の豊富さに比例するものであり、ヘンリー七世時代の一クラウンは今日の一ポンドと同一の目的に役立つものであつたからである」、と述べる。では貨幣數量と物価との関係についての右の如き數量説的の理論を説くことがヒュームの目的であつたと云うに、ヒューム貨幣論の目的は他の点にあつたと云わねばならぬ。

貨幣論の主要目的の叙述に入る前に、ヒュームは先ず貨幣量が豊富である場合の不利益と、それに関連して銀行信用の便益に対する疑問について述べる。「いかなる場合にも、内国的にも對外的にも個人としても國としても、

有用のものは国民の大なる数と彼等の大なる勤勉とである、貨幣量の豊富というようなことは、場合によつては例えば外国との商業においてはそれが却つて国の不利となるものである」、と述べて貨幣量の豊富が必ずしも一國の幸福でないことを説くのであるが、推論は要するに生活水準の高き國は輸入超過國となるという貿易循環論によるものである。しかしこの点は後に貿易論で詳しく説かれていたので貨幣論で特にこれを説いたわけではない。貨幣量豊富の問題に関連してヒュームが貨幣論で説いた注目すべき問題は銀行紙幣に関するものである。

「右の点に関連して、私は今日諸國で一般に有利とせられている銀行及び紙幣(Paper-Credit)の便益について一の疑問をもつている。商業取引及び貨幣量増加による諸物と労働の高価は種々の点より見て一種の不利であるが、それは吾々が希望する國の富と繁栄の結果としての避けがたき不利益である、……しかしこの不利益を一種の模倣貨幣の使用によつて増大せしめる必要はいづこにも存在せない。この種の貨幣は外國人がいかなる取引においてもこれを受取る貨幣でないであり、且つ國の秩序が紊亂せる際には無価値に帰すべきものである。……故に紙幣については國が一の國營会社(Public Company)を設けこれに紙幣發行の利益を与えることが得策である。……しかしこのような信用通貨を作為的に増加せしめることはいかなる商業國にとつても利益ではない。それは労働と商品に対する自然の比率以上に貨幣を増加せしめ、商人と製造家に高價格による不利益を、ひいては同様に國に不利益を与えるからである。」これが貨幣論でのヒュームの紙幣に関する意見である。貿易收支論ではヒュームは齟つて銀行信用の便益を説くのであるが、紙幣そのものについての彼れの見解は右の如くであつたのである。

さて貨幣論での主要問題の説明に入るに先立ち、ヒュームは再び貨幣に関する數量説的前提を繰りかえすのである。即ち、「金銀の貨幣が多量に存在する國では、多量の貨物を代表せしめるために多くの貨幣が要求せられ

ているわけであるから、その国としてはその結果は良くも悪くもないことである、それは商人の帳簿に少き文字のアラビヤ数字の換りにローマ字の記帳法が用いられるのと同様のことである。」と。この前提に誤りはないのであるが、しかし世上には、貨幣の豊富が国の繁栄を而して貨幣の稀少が窮乏を意味するものとし、前述の前提は事実と矛盾すると見る考えが一般的である。そこでヒュームは貨幣の豊富と稀少との二の場合についての、一見矛盾と考えられる現象についてこれが解説を行おうとするのであるが、それがヒューム貨幣論の主要問題なのである。

先ず第一に、貨幣量豊富の場合についてであるが、「アメリカにおける鉱山の発見以来金銀の流入したヨーロッパ諸国では産業が大いに増進したが、それは金銀の増加によるものであり」、従つて貨幣量増加が良き結果をもたらしたのではないか、との見方があるのに対して、ヒュームは次の如き方法で、貨幣量の大小そのことは良くも悪くもないことである、という前提に矛盾の存在せぬことを説明する。ヒュームの言葉そのものを掲げることが省略して、今日での説き方によつて解説を行うと次の如くである。即ち、金銀増加と物価騰貴が均衡状態に達する場合、それを良くも悪くもない状態と云うのであるが、金銀の流入と一般物価騰貴との間には不均衡状態の期間がある、その期間には企業者の生産意欲と労働者の勤勉が刺戟せられ産業活動が活潑となる。この状態が一国にとりて望ましいことであつて、貨幣の増加そのことが好ましいことでないのである、と。

右の如くに説いて而してヒュームは次のように述べる。「一国内部の幸福については貨幣の数量が大であるか小であるかは問題ではない、ただ政府の賢明な政策としては貨幣を常に増加しつつある状態にあらしめることである。……貨幣が減少しつつある国はその際において、現在はより少量の貨幣をしかもたないが、しかしそれが増加しつつある国よりも、力弱く且つ不幸である。その理由は、貨幣量の変化はいずれの方向であれ、それが直ちに商

品価格の同率の変化によつて伴われるものでない点を理解すれば自ら明かである。貨幣量の変化によつて物価が新しき位置に定まるまでの間に、一の中間期間が存在する。金銀が減少しつつある場合のその中間期間が産業に悪しき時であり、金銀が増加しつつある際のその時期が有利の時である。以上が第一の問題に対するヒュームの解説であるが、これによるとヒュームによつて均衡状態または静態と不均衡状態または動態に関する理論が理解せられていた、と見られるのであつて、ケインズがヒュームの立場を批判したのも右の点をとり上げてのことであつた。

第二の問題は、貨幣の稀少が国の窮乏と不幸であるという事実と前述の前提問題との間の矛盾に関するものであるが、この点についてヒュームは先ず次の如くに言う。「貨幣が稀少であるための結果を悪しき方に考える場合、それは実は国民の行為と習慣による結果と貨幣の稀少による他の結果とを混同せるものである」と。かくてヒュームは右の場合、貨幣の稀少そのことが窮乏の原因でなく、貨幣を広く流通せしめるに至らない国民の経済生活上の幼稚な習慣がその原因であると説く。

「価格は国に存在する商品と貨幣との絶対量に依存するものでなく、市場に現われまたは現われ得る商品と流通する貨幣の数量との関係に因るのである。若し貨幣が金庫に保管せられ、商品が倉庫に貯蔵せられるとすれば、……貨幣と商品とは相い合せないのであつて相互に影響し合うことがないのである。」右の如くに説いてヒュームは、商業の発達せない幼稚な国と然らざる国において、貨幣量は同一であるとするも、前者では流通にもち来たされる商品量が稀少であるために商品価格が高くて国民生活は窮乏であるが、後者では多くの商品が市場に現われるが故に商品価格は安く生活は豊富であるとし、而してこれは貨幣の稀少と否とによるものでなく、流通経済の発達と否とに原因するものである、と説く。

「右によつて吾人は、歴史家によつてまたは日常の会話によつて、或る国は土地が肥沃で良く開拓せられ人口も稠密であるが、唯だ貨幣に欠乏しているからその国は弱国である、と言われていることが誤りであることを知るのである。蓋し貨幣の欠乏は決して国の実体を損するものでない、何となれば人間と物とがいかなる社会においてもその実質的の力であるからである。右の場合ただ社会を害するものは、金銀を少数者の手に留らしめてこれが広き流通を不可能ならしめるような、単純粗野な人々の生活の仕方である。これに反し、一国における貨幣の数量がよし少量であつても、国民の各種の生活での勤勉と洗練の結果は貨幣を一國全体に普及せしめ貨幣を社会生活に同化せしめる。而してすべての取引と契約に貨幣を關係せしめる。……これがすべての貨幣と商品とを流通にもち來たさしめる方法である。而してそれによつて物価が安く生活が豊富になる筈である。」以上が第二の問題に対するヒュームの結論の言葉である。

要するにヒューム貨幣論の主要内容は右二つの問題を解決する点にあつたと云つてよい。

四 貿易收支論 (Of the Balance of Trade) その他についで

貿易收支論でヒュームは、金銀貨幣の在高一國の人口と産業活動の大きさによつて定まるもので、各國にはそれに適当な貨幣量の水準があり、その水準が正常の線から上下する場合には商品輸出入に変化が起つて貨幣水準が正常に復すると云うように、貨幣量と輸出入との間には循環的の關係があつて、貿易の均衡と調和に向つての運動が自動的に行われるという、貿易循環説または貿易平衡説の理論を説いている。而してその理論に基いて、金銀の流出をおそれ何をおいてもその流入をはかるといふ重金主義政策の過誤を指摘している。貿易收支論の次の論

文は「貿易上の偏見」(Of the Jealousy of Trade)——貿易上のさい疑——と題するものであるが、この論文では国際分業と自由通商の主張が説かれ、現実の問題としては前の論文と同様に英国の重商主義政策に対する熱烈な抗議が述べられている。

貿易收支論の初めの部分で、ヒュームは先ず金銀流出を憂い、この愚なる所以を説いて次の如くに言う。「これはいかなる場合においても根拠のなき心配である、国に国民と産業が存するに關らず若し貨幣が流出し尽くすことがあり得るならば、吾々はその国の河川が枯渇し去ることを恐れなければならぬ。されば唯だ国民と産業の維持にこそ留意すべきである、そうすれば貨幣の喪失を惧れる必要はないのである。」而して続けてヒュームは次のようにも述べた。曰く、英国人は嘗て某氏の發表した英国貿易收支の大なる支払超過の説明（それによると五六年後には英国は無一文になる筈であった）によつて大なる衝動を受けた、然るに幸にも某氏發表後の二十年間が而かもその間に莫大な国費を要した戦争が行われて経過した、と。

次に貨幣量と輸出入との關係が循環的である理由をヒュームは次の方法で説明する。仮に英国の貨幣量が五分の一に減少するものとすれば、英国の物価水準はヘンリー諸王とエドワード諸王の時代（十五—十六世紀）と同一程度に低くさになる筈であるが、そうすると輸出が大いに増加して英国は多くの時を要せずに喪失した貨幣を取り戻すことができる。しかし貨幣量が元の水準に達すると英国の輸出に有利な条件が失われるので、その上の貨幣流入は止まるのである。次に右と逆に例えば貨幣量が五倍に増加せる場合を考えると、物価騰貴・輸入超過・貨幣流出の過程を経て貨幣量の水準が旧の位置に引下げられることになる。要するに、例えば異つた場所の水はそれが相い疏通する限り常に同一の水準を保つように、国々の間に通商が行われる場合各国の貨幣量は時には正常の水準を離れる

としても、結局は適正の水準を回復するものである。なお貨幣の水準ということについてヒュームは特に註解を行つて、それは各国間における商品・労働・産業活動・技術などに対する貨幣の割合のことであり、一国のそれらが他国の二倍であれば貨幣量も二倍でなければならぬ、と説明する。

右に貨幣量の水準と言う場合の貨幣は金銀のことであるが、ヒュームはこの貨幣水準は人為的・制度的に或は低くまたは上昇せしめられることがあると云う。貨幣水準を低下せしめるものは銀行信用と紙幣の制度であるが、金銀の代替物たる紙幣の流通増加が物価騰貴の結果を招くことそれは金銀の増加の場合と同一であるが、しかしヒュームは、「貨幣が紙であると金銀であるとそれらの増減が国内的に個人の富と幸福に異つた影響を及ぼすものではないこと勿論であるが、国際的には金銀貨幣の増加の方が有利である、……そこで紙幣の増加は、貨幣増加の利益はこれを收得せずにその悪しき結果（物価騰貴）だけを招くことになる」と言う。然らば紙幣の流通が行われないと貨幣が稀少になるかと云うに、この点についてヒュームは、紙幣が存在でないか減少するかの場合には貿易の關係で金銀が流入して適正な貨幣水準を充たすことになるから、その心配はないと言うのである。かくてヒュームは金銀貨幣の水準を引下げる紙幣の流通をその悪き面から見て茲ではそれを好ましからぬものと見ている。

一応は紙幣について右のように説くのであるが、しかしまたヒュームは銀行信用と紙幣についてその長所と便益の存在することを認めなければならぬと言う。即ち、「信用通貨はそれが金銀を駆除する点で非難せられなければならぬが、しかし元々金銀は他の何物にも換えがたいと云うほどに重要なものではない、故に紙幣の正しき利用によつて産業の拡大が実現するものとすれば、それは金銀の増加に勝るものと云わねばならぬ」と。而してヒュームはエディンバラの銀行で創められたバンク・クレディットの取引方法を説明して、それが商業に大なる利益をもた

らしたことを説いた。（筆者曰、右にヒュームがバンク・クレディットと云つたのは後にキャッシ・クレディットと称せられた取引であつて今日の当座貸越取引に類するものである）。

以上は貨幣量（金銀）の水準を低下せしめるものとしての紙幣の問題に関するものであるが、次に貨幣の水準を高くする方法としてヒュームは政府による金銀蓄蔵を説くのである。しかし根本的には人口と産業の大きさによつて定まる正常の貨幣水準への復帰がいかなる場合にも行われると見るのがヒュームの本意であり、従つて彼は金銀の喪失をおそれ行われる不自然なる貿易政策を排撃するのである。即ち英国の重商主義貿易政策に対する攻撃と、而してこの貿易收支論への結言がヒュームによつて次の言葉で述べられる。

「吾々は英国が外国貿易において施設した多くの障壁と関税についてその正当の理由を発見するに苦しむものである。それは或は貨幣増加の欲望に基くものであるが、貨幣はそれが流通する限り正常の水準以上に溜り得ないのである。或はそれは金銀喪失の懸念によるものであるが、同様に金銀はその適当な水準以下に低下せないのである。……右の如き貿易政策は、造物主が各々の国に異つた土地・氣候・特質を与え、而して各国に自由な交通・交換の便益を享受せしめんとした、その利益を各国より剝奪するものである。」

「以上要するに、一国の政府はその国民と産業の保全に最善の注意を払うべきであるとの主張に最大の理由が存在すること明かである。……貨幣については、それは政府が国民と産業とを尊重せる上において問題とすべきことである。」

以上が貿易收支論の要旨であるが、次の論文「貿易上の偏見」（貿易上のきい疑心）では国際分業の利益と自由通商の主張が、前の論文を補足する意味で説かれている。「今日多くの国では、隣国の進歩をきい疑の眼をもつて眺

め、すべての取引国を敵視してそれらの国の繁栄を自国の損失と考えることが、普通となつてゐるが、この偏狭で且つ有害な考えに反対して私は敢えて次の如くに言う、一国の富と商業の増進は近隣諸国のそれと共存的のものであり、従つて一国が若し無智でもう味な国によつて囲まれてゐる場合、その国では商工業の發達を期待し得るものでない、と。」

右の如くに述べてヒュームは、英国の商工業も進歩せる他の西欧諸国に負うところのある点について英国民に反省を求めるのである。

「何れの国でも、近隣諸国がすべての技術と生産業とに進歩して自分の国に何物をも需める必要がないことになりはせぬか、と云つた心配をする必要はない。自然は各国に異つた才能と氣候と地質とを与へてゐる、そこで各国が勤勉であり進歩的である限り、相互の間に商業交通が必ず行われることになつてゐる。」 國際分業の原則を右のように述べた後、ヒュームは重要産業に対する外国の競争について次の如くに述べる。「或る商品が一国で重要産物と称せられるのは、その国がその商品の生産について或る特殊の而して自然上の長所を有するが故である。然るにその長所にかかわらずその国がその生産業を失うことになるかすれば、それはその国が怠惰であつたか政治が宜しきを得なかつたが為であつて、外国のその工業を怨むことは失当である。」 このように國際的自由競争を是認し競争が相互の産業を進歩せしめる所以であることを説くのであるが、外国需要の減退せる工業については、例えば羊毛工業がリンネルとか絹とかの他の纖維工業または他の種目の生産業へ生産の轉換を行う途があると言ひ、而して「吾々は産業の目的物が無くなるというような心配をする必要がない」、と説くのである。

かくてヒュームは英国の重商主義貿易政策に反省を促がすための本論文の結言において次の言葉を述べるのであ

つた。

「今やわが国は貿易に関し偏狭且つ悪質の政策に終始しているが、この政策の成功は次のことを意味するとしか考えられない、即ちそれは吾々が近隣諸国をモロッコとかバアバリアと同様な怠惰と沈滞の状態に在らしめることである。その結果はどうかと云えば、彼等は吾々に一の商品をも送り得ずまた吾々から一の商品をも買ひ得ないということである。その状態の下では吾々の産業は衰頽し吾々自らもそれらの国と同様に賤劣な状態に陥らねばならぬのである。それ故に私はただの人間としてでなく一人の英国国民として敢て言う、私は独逸・西班牙・伊太利の而して仏蘭西までも商業の繁栄を祈るものであることを。私は少くとも皇帝と各大臣が、国際関係について私の意図する如き寛大且つ互恵的感情をもつて対処されるに至るならば、わが大英国とその国民は一層の繁栄を期待し得ることを確信するものである。」

後記。ヒューム全集として、"Essays Moral, Political, and Literary; by David Hume." Edited by Green and Graes. があり、「人性論」には他に単行本があり、「政治論」と他の論文とを併せた単行本もある。筆者はある時期に Hume's Essays: The New Universal Library. で「政治論」と他の論文とを耽読したことがあるが、本稿はこの書と前述の全集本とに拠つたものである。

なお本稿と同一題目の論文を「大阪商業大学論集」第三号（昭和二十八年十月）に載せたことがあるが、本論文は稿を新たにしたものである。